

世界同時株安後、日本株は自律反発で朝方の下げを縮める

2010年6月8日(火)

第一生命経済研究所 経済調査部
副主任エコノミスト 人見 小奈恵

TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

欧州のソブリンリスクに対する懸念が払拭できず、世界同時株安

ハンガリー財政問題への不透明感やユーロ安等、欧州景気や金融システム不安が払拭できない中、欧米株式相場はともに大幅安となりました。ハンガリー政府は、先週の発言を受けたハンガリー経済への市場の混乱に対して火消しに追われましたが、市場では欧州経済に対する不透明感の払拭にはつながりませんでした。為替市場ではユーロが対ドルで4年ぶりの安値を付け、欧州情勢に神経質になっている投資家心理を冷やしました。また4月の米消費者信用残高が前月比で増加したものの、3月の数値が速報値より大幅に下方修正されたことから、米国消費に対する先行き不透明感が広がりました。金融株については「米金融危機調査委員会が米投資銀行大手に召喚状」との報道も嫌気されました。大引けにかけて債券価格が上昇する中、株価指数は下げ幅を拡大し、NYダウは昨年11月以来、約7ヶ月ぶりの安値を更新して引けました。アジア、欧州、米国と世界的に株安となる中、商品先物市場でも原油や非鉄金属が軒並み続落しました。一方で金先物価格は大幅続伸し、投資家のリスク回避姿勢が鮮明の相場展開でした。

東京時間ではリスク回避姿勢が和らぎ、日経平均株価は小幅ながら自律反発

日本株は海外株安を受けて大幅安で始まりました。ただし、寄り付き後は、前日大きく下げた銘柄中心に買い戻す動きが見られ、株価指数は下げ幅を縮小していきました。外部環境も総じて落ち着いており、海外市場で見られた円高の動きも一服したことから市場では過度な不安感が徐々に後退し、輸出関連株や資源関連株などの景気敏感株中心に値を戻す銘柄も見られました。東証マザーズ指数が大幅反発するなど新興市場も総じて堅調に推移しており、日経平均株価は10時頃に9,500円台を回復し、まもなく前日比プラス圏へと転じました。市場では悲観的な動きは見られなかったものの、積極的な買い姿勢も乏しく、後場からは方向感の乏しい展開でした。日経平均株価も上値を追う動きは乏しく9,600円の手前で失速し、引けまで膠着状態が続きました。結局、日経平均株価はかろうじて前日比でプラスで引けましたが、TOPIXは大手銀行株等が重しとなり小幅安でした。

市場環境がやや落ち着きを見せる中、銀行株は朝から軟調で終日株価指数の上値を抑えました。欧州発の金融システム不安や金融規制強化の動き等を背景に海外市場でも金融株の軟調さが目立っており、国内市場も同様の流れとなりました。米国市場同様、国内でも市場参加者は少なく、外部環境の不透明感が払拭できない中、投資家は様子見姿勢を強めており、株式などのリスク資産への投資を手控えている様子が窺えます。

以上